

日 常 フ ラ ン ス 語

原 野 昇

フランス語ばかりではなく何語でも、学校や教科書でならった言語と実際に日々話されている言語とが、発音、統語法、綴字法などあらゆる面において異っていることがしばしばある。このような点から、今日パリで話されているフランス語を中心に気が付いたことを少し述べてみたいと思う。

フランス語の発音全体に関して、パリに着いて最初に受けた印象は、鼻音の強さと“r”の音の特異性である。これは当然予想されることであり、一年経った今となっては別に何も感じなくなっただが、最初は随分耳についたものである。L'homme qui ment (映画の題名)を L'homme qui mort と聞き間違えたことがあるが、これは ment を口の奥の方で発音している結果と思われる。しかも口の奥で発音されているということは、徹底的に空気を鼻から出しているということと無関係ではないと思われる。同じような例で、フランス人と結婚しているある日本人女性は、Gentilly という駅(地)名を片仮名で ジョントィイーと書いていた。

フランス語の“r”の音が、喉の奥で発音される非常に特徴的発音であるということは周知の事実であるので、ここであらためてふれる事はやめにして、筆者は残念ながら今でもうまく発音できないということだけ記しておく。

発音が難しいと言えば、[ø] や [œ] の音などもその例外ではない。例えばエレベーターの中で [døzjem] étage. (2階) と言うべきところを [duzjem] (12階) と言ったらしく、その建物が7階までしかないのでびっくりされた事もあるし、またバスの中で「私は若い ([œn]) ですから」と言って席を譲ると、譲られた人が変な顔をしているので、どうしたかと思ったら、後で気が付いた事であるが、どうも相手には「私は黄色人種 ([ɔ:n] 黄色い) ですから」と聞えたらしく、何故この人は自分の肌の色をそんなに気にしているのであろうと不思議であったらしい。

後にみるように、会話では当然ながら文が省略などにより短くなる傾向があるが、いくつかの語においては語末の子音まではっきり発音されるという現象もみられる。例えば plus [plys], また août [ut], but [byt] と同様に fait [fet] (名詞に用いられた場合) など。あるいはまた Jesus-Christ を [ʒezykrist] と発音する人もあるし、さらに Chamornix を [ʃamoniks] と発音する人も相当いる。このように言語の経済の法則に逆行するような例は他にもみられる。例えば pas encore を [pa ʔkɔ:r] というふうに liaison し

ない人が最近多い。

個々の発音についてはこれくらいにし、次に発話単位でみてみよう。普通の会話ではスピードが速いので、どうしても聞き取り難い語や聞き逃がす語がある。例えば Vous descendez à la prochaine? 「次(の駅)でお降りですか」(これは乗物の中などで、自分が次で降りる場合、「ちょっとすみませんが道をあけて下さい」の代りによく用いる表現)が [vdəsədə ə l prəʃən] の如く descendez と prochaine 以外は非常に弱くほとんど聞こえないくらいである。もっとも à la prochaine を省略して、Vous descendez? だけのことも多い。その場合には [sədə] だけしか聞こえないくらいである。il y a ~ という表現は [i a] と聞こえるし、否定辞“ne”も聞こえない場合が多い。例えば C'est pas grave. とか Je crois pas. の如く。ところが最初聞こえないと注意していたものは、聞こえないのではなく発音していないのだということが明きらかになってきた。自分でも何度聞いても、彼らは発音していないと確信が持てきたし、また印刷された会話文においてもそれが明きらかにあらわれている。例えば C'EST PAS NOTRE “PAVANE POUR UNE ENTENTE DES FEINTES” ÇA/.....(Figaro 紙 1968年1月5日付、第一面のマンガ), ET VOTRE PIÈCE, AU MOINS, ELLE EST PAS FAUSSE? (Le Nouvel Observateur 誌, 1968年3月20-26日号 N°175, P27 マンガ), MAIS ÇA FAIT RIEN/ (同誌 1968年8月26-9月1日号 N°198, P27 マンガ), JE SAIS PAS LIRE L'HEURE/ (同誌同号同ページ), JE SUIS PAS LE FACTEUR, MDN GARS/ (マンガ Super Rocket Pilote P.5)(下線はいずれも筆者, “i”の大文字に注意, 店の看板などで大文字ばかりで書かれていても“i”と書いてある場合がある), このように否定の“ne”は聞こえないのではなく、全く発音されていないのである。また Je ne sais pas. は [ʃe pa] となる。つまり“ne”が省略されるだけでなく、文の縮約の結果発音まで変化しているのである。この場合の [ʃe] は Je sais pas の“Je”と“sais”とが縮約されたものと思われる。もともと“je”はしばしば [ʃə] と発音される。例えば [ʃə teim] (= Je t'aime) の如く、言い換えれば最少エネルギーの法則に適っているわけである。

否定辞以外でも、例えば Z'AVEZ INTÉRÊT A VOTER./ (選挙のちらし)のように代名詞“vous”が liaison のところだけしか発音されていない。口語において発音的に縮約される例は他にもみられる。例えば voilà は [vla] となり v'là と書かれることがあるし、celui-ci, celui-là は [sui si], [sui la] と発音され, qui-ci

qui-la と書かれることがある。

これらの事実はあらためてここに書くまでもなく、特に否定の“ne”の省略などすでに各方面で指摘されており、筆者自身 W.V. Wartburg やその他の書物でそのような叙述を読んだ記憶があるが、その時はなかなか納得できず、むしろ信じ難く思っていたくらいである。ところが今現場に直面し改めて書き言葉と日常会話との隔たりの大きさに感心している次第である。

話を元に戻すことにしよう。il y a が [i a] になるということは、代名詞 il が次に y [i] が来ている結果それと一緒になってしまって、il が省略された形となっているのであるが、次に [i] の音が来なくても il が全く省略されてしまうことがある。例えば Il faut ~ というのは単に Faut ~ (例えば Faut aller. の如く) と言う。ところが代名詞 il は今でも [i] としてはっきり発音される場合もある。例えば I (=Tl) t'a vu ? それ故先の場合、中間的段階として [i i a] または [i : a], [i fo] という形が想定できる。事実、少しあらたまった会話ではそのように発音される場合があるが、くだけた会話では [i a] [fo] の方が圧倒的に多いようである。それはこれらが非人称動詞による慣用的表現であるからかも知れない。

指示代名詞の中で、先に挙げた ceui-ci (qui-ci), celui-là (qui-là) も会話においてよく用いられるものであるが、どれにもましてしばしば用いられるのは “ça” である。店などで、「これは3フランで、あれは5フランです」という場合、品物を手に取りながら、あるいは指さしながら、“ça c'est trois francs, ça c'est cinq francs.” という。この ça c'est ~ という言い方は会話において非常によく用いられるもので、Saint-Exupéry の Le petit prince にもしばしば出てくる。例えば, ça c'est bien intéressant, dit le petit prince. ça c'est enfin un véritable métier, (Gallimard 版 P.53-54), これはその場の状況から聞き手と話し手との間で “ça” と言っただけで直ちに了解の成立する場合に用いられるもので、しかも ça と一度言っていて c'est ~ ともう一度言い直しているのは、ça で「それは」とか「そのことについて言えば」と話題を初めに限定した後、改めて主語、動詞をもった(時にはもっていない)文を始めているものである。そして大抵の場合このように用いられた ça はアクセントを取り、調子も最初から高く、しかも上り調子(——↗)であり、ça の後には切れ目がある。だから文字にする場合には virgule をつけてもいいくらいである。例えば ça, c'est intéressant ! (Petit prince 同版 P.68), Et ça, c'est triste ! (同 P.69) これも一種の ditopical expression と言えるかも知れない。ただ日本語の場合、例えば「広島は

カキがうまい」のように、第一 topic すなわち “ça” に相当する部分に色々な語が来得てその表現がごく一般的に用いられるが、フランス語の場合にはそこに “ça” 以外の語が来るのは特別な強調などの場合だけで稀である。その代り ça による ditopical 構文は、特に会話においては、非常に一般的である。

この ça は話題（または主題 = topic）であり、なにも主語であるとは限らない。例えば A が B に質問し、B がそれに答えた後、さらに A が突っ込んで質問した時、B は “Ah, ça chais (= je ne sais) pas.” と答えた、この場合の “ça” は話（主）題ではあるが、どちらかと言えばむしろ目的語に近い。それにしても上の文を日本語の「さあ、そりゃー知らん」と比べたら、“ça” と「それは」の用い方のみならず語順と言い、主語の省略と言い、何と類似しているのであろう。

最後に俗語的表現について少しだけふれておこう。フランス語には、日本語で俗語があまり豊富でない、あるいは俗語的表現がみられないような分野にも俗語がある。例えば、salut!（会った時や別れる時の挨拶語、「おっす」に相当すると言ってもよいか知れないが、女性も使うし、大人も使う）、flic「ポリ公」（女子学生も使う）、flic「銭（ぜに）」などの俗語があっても、日本語にもあるし、不思議ではない。また gazier「男」、「野郎」、mec「野郎」（argot）、minette、nanan、nénés（すべて「女」、「女の子」）や、Prenon un pot「（ビールか何か）一杯飲もう」、pinard「ブドウ酒」（兵隊、学生の argot に近い）、picoler「（主にブドウ酒を）飲む」（同じく学生の argot に近い）などは、日本語にないかも知れないが、これらの分野に俗語があっても不思議ではない。ところがフランス語では次のように天候を言うのにも俗語的表現がある。例えば Il pleut、「雨が降る」の代りに俗語では Il flotte.（または ça flotte）と言ったり、ça mouille.（多少 Bretagne 地方の方言的色彩が残っているようである）と言う。（どちらも水に関係のある動詞である）、また Il fait froid「寒い」の代りに ça caille（または On caille）と言う。また衣服や身につけるもの、あるいは身体の部分にも俗語がある。例えば pantalon = futa, palser（以上 familiers）、grimant（主に学生）；slip = calebar；chaussures = tatanes；montre = breloque；lunettes = binocles；parapluie = pépin；main = paluche；jambes = guiboies.

以上のような天候や衣類などを表わすのに日本語に、別の言い方や方言は別として、俗語的表現、言い換えれば友達同志や極く親しい人同志の間では使えるが、例えば学生と教授が話す場合などに

は使わないような表現があるであろうか。この点何故このような分野に俗語が生じたか、その発生使用範囲など、日本語や他の言語と比較しつつ研究すれば面白いと思う。しかし俗語 (mots vulgaires) の中には、日常語 (mots familiers) に近いものから隠語 (argots) に近いものまであり、事実上に挙げた例の中にはフランス人が argots あるいは expressions argotiques と指摘するものも含まれている。(しかし、ここでは argots を非常に狭義に限定し「俗語」という語は広義に用いている)。そして一つ一つの俗語についてそれぞれその用いられる範囲が年齢、性別、その他により異っていると云ってもよいくらいであるので、ここでは俗語についてこれ以上詳しくはふれないことにする。

第 四 の 男

ア サ ー ナ ス

岡 野 純 訳

コンドラス家の娘は大変な間違いをしでかした。二十二才の無分別でコスターキス・ドゥーカスを恋し、ある冬の夕暮れ、城跡のとある道はずれのものかげで彼に身を萎ねたのである。そのあやまちに気づいて彼女は、八日の中に自分を兄たちに貰いに行ってくれるようにとコスターキスに求めた。そして八日経っても彼がそうしないのを知り、それどころか故意に彼女を避けるのを見て、彼女は躊躇することなくすべてを母親に打ち明け問題の解決をえようとした。兄たちは激昂した。すぐに彼女を殺すことを要求した。そしてほんとに殺したかもしれない。しかし母親が気を配って彼女をその姉の許へ逃してやった。『不明誓がこの家に二度と踏み込まないように、やつをぶち殺してやるんだ。』

『やつを串さしにしてやる。』

『生きたままやつの髪の毛をむしりにとってやるんだ。』兄たちはみな口口にむごい殺し方をしそうな様子を見せた。ただ一番下の、つまり四番目の弟だけは一言も言わず、今まで見たこともないわが家のはげしい嵐を目にしながら、全身をわななかせつつ部屋の片隅にうずくまって泣いていた。彼は十六才の少年で、誰もこの子供には注意せず、臆病な涙のほかにはこの子から何の助けをも期待してはいなかった。

長兄のソティーリスは、コスターキスをつかまえて三日以内に、傷つけられた妹と婚約するようきっぱりと要求しようと決心した。

もし拒絶したならばその時には他の解決法をとろう。コスターキスは父親のない金持息子で、夫